

# 西南学院小学校 学校長メッセージ

## 「学校通信 Wings 2019年9月号」

私はぶどうの木、あなたがたはその枝である。 ヨハネによる福音書 15章5節

32日間の夏休みが終わりました。今年はお盆休みに台風が襲来し、旅行に出たり帰省したりされていたところは大変だったのではないかと思います。大きな事故もなく子どもたちが元気に始業式を迎えることができたことを感謝したいと思います。夏休みの最後はぐずつき気味の天気が続いたこともあって、昨年ほどの猛暑にはなりませんでしたが、体調管理に十分気をつけて生活のリズムを整えるようにしてください。

ところで2学期は最も長く、気候的にも学習に適しています。この大切な学期の始まりにあたり、「学力」について少し考えてみたいと思います。何年か前に出版された本に、『『学力』の経済学』（教育経済学者中村牧子著 ディスカヴァー・トゥエンティワン出版）があります。教育経済学とは文字通り教育を経済学的手法で分析するもので、この本は「Based on Evidence」。科学的根拠を何より重視して書かれています。

例えば、子どもをご褒美で釣っては「いけない」・ほめ育てはしたほうが「よい」・ゲームをすると「暴力的になる」などといった通説に対して、「その主張の多くは、個人的な経験に基づいているため、科学的根拠がなく、それゆえ『なぜその主張が正しいのか』という説明が十分なされていない」とし、データを基にした分析結果が述べられています。出版後いろいろところで話題となったので読まれた方もいらっしゃると思いますが、本書の中では普段あまり考えることのない非認知能力の重要性についても書かれているところがあります。私たちはややもすると、ペーパーテストで測ることのできる認知能力だけに興味が向きがちです。もちろんそのような力も大切であることは確かですが、豊かな人生を送るために必要なことはそれだけではないということをお伝えしていると思います。

ポイントとなる部分を要約抜粋してお伝えします。

1960年代から、「ペリー幼稚園プログラム」と呼ばれる就学前教育プログラムが、低所得のアフリカ系米国人の3~4歳の子どもたちに「質の高い就学前教育」を提供することを目的に開始されました。このプログラムは、学歴・年収・雇用などの面で大きな効果を上げ、しかもその効果が長期にわたって持続したことが明らかになりました。

しかし、子どもたちへの学力やIQへの効果は短期的なものでした。プログラムに参加していない子どもたちとの差は入学前頃こそ大きかったものの8歳前後には差がなくなったのです。

このプログラムによって改善されたのは「非認知能力」と呼ばれるものでした。これらはIQや学力テストで計測される認知能力とは違い、「忍耐力がある」「社会性がある」「意欲的である」といった、人間の気質や性格的な特徴のようなものを指します。本来は目に見えませんが、心理学的な方法を使って数値化することができ、その数値を分析した結果、非認知能力は認知能力の形成にも一役買っているだけでなく、将来の年収、学歴や就業形態などの労働市場における成果にも大きく影響することが明らかになってきました。

研究によれば、高校に通わずに高卒認定試験に合格した生徒は、高校を卒業した生徒に比べて年収や就職率が低い傾向にあることが分かりました。もし認知能力のみが重要なのだとすれば、両者の間に大

きく差がつくはずはありません。

研究の責任者は、非認知能力が人生に成功において極めて重要であることを強調しています。また、誠実さ、忍耐強さ、社交性、好奇心の強さ—これらの非認知能力は、「人から学び、獲得するものである」とも。おそらく、学校とはただ単に勉強する場所ではなく、先生や同級生から多くのことを学び、「非認知能力」を培う場所でもあるということなのでしょう。

別の研究も非認知能力の重要性を明らかになっています。米国の大学生で中退することなくきちんと大学を卒業できていたのは、共通テストの成績がよかった学生ではなく、出身校のレベルに関わらず通知表の成績(締め切りを守って宿題を提出したり、授業中に積極的に発言したりするという非認知能力も反映されている)がよかった学生だったことが判明しました。高校でよい成績をとる過程で獲得した非認知能力(まじめ・先生との関係がよい・計画性がある・やり抜く力がある など)は、高校を卒業してからも、彼らを成功に導いてくれたのです。

ある研修の際聞いた、民間教育機関で成績優秀な生徒たちに接してきたという講師の言葉を改めて思い出しました。強く印象には残っているものの、もう20年近くも前のことなので、そのとおりに再現できませんが、「成績が良くても必ずしも社会に出てうまくいくとは限らない。公私ともに充実した生活を送っている者は、共通して、友だちの喜びを自分のことのように喜んでいた。友だちのために喜んで力を尽くしていた。」といった内容でした。

通信技術が発達した今の時代、知識や方法の伝達だけなら学校は必要ないのかもしれませんが。しかし、〈学校〉言い換えれば〈かかわりの中〉でしか育てられない大切なことが数多くあると思います。

「知恵を育む」「隣人愛を育む」この二つの教育目標のもと、子どもたちが豊かな人生を送っていくための礎をしっかりと築くために、学校と家庭とが両輪となって教育活動を進めていくことができますよう、どうか2学期もよろしくお願いします。

(文責 宮崎 隆一)